

ペットボトル®を通し、総合学習の展開と姨捨棚田のシンボル作り。

取組に至る背景・事業の目的

「さらしな」は古くから名月の里として、歌人・俳人が月をめめていた。姨捨の棚田に月が映える「田毎の月」は、江戸時代に流行した歌川広重の浮世絵により「さらしな おぼすて」の代名詞となった。

日本遺産に認定されたこの素晴らしい地域を再認識し、次世代へ体験とともに引継ぎ、さらに多くの方々に姨捨棚田を来訪するきっかけとなることを目指し、活動を実施する。

事業内容

小学校の総合学習時間にクリーンエネルギー学習教材「ペットボトル®」の作成と環境学習を行うとともに、日本遺産となった姨捨棚田に関する郷土学習を実施し、姨捨棚田へ「ペットボトル®」を設置することで田毎の月を表現する。

1. 環境教育 (リモート形式)・工作教室

リモート形式により環境学習を実施。その後、昨年工作教室を体験した中学生が講師となり、小学校高学年に指導。(リレー式授業)

環境教室・工作教室参加者：154名 (地元小学校4～6年生)

環境教室講師：サンケン電気 (株)

工作教室講師：25名 (地元中学校2年生)

2. 工作教室 地元小学校で実施

工作教室を体験した高学年が低学年の指導を行うリレー式授業を実施。

参加者：152名 (1～3年生)

3. ペットボトル®設置イベント 11月に姨捨棚田で実施

地元小学校3校と一般参加者によるイベント 計4回開催

参加者：延べ179人 (地元小中高校生、一般)

ペットボトル®設置数：計3,800個

4. 田毎の月を表現 (姨捨棚田をライトアップ)

R3.11.20からR4.3.19までの期間、ペットボトル®を設置。

撤収はボランティアを募集して実施。



【ペットボトル®】



【ペットボトル®で「田毎の月」を再現】

事業効果

- ・環境教育では、ペットボトル®の構成要素であるソーラー発電を題材に学習を行い、地球温暖化を防ぐ取組や郷土の自然環境を守る意識の向上などが図られた。
- ・工作教室では、生徒児童自らが教える側になることで、教える側も、教わる側もより大きな関心、好奇心を呼び、多大な教育効果があった。
- ・自らが作ったペットボトル®を設置し田毎の月を表現することで、地域愛を育むとともに姨捨棚田の新たな魅力の発掘につながった。
- ・新聞等メディアに取り上げられたことによる関心の高まりなど、地域活性化へもつながった。

工夫・苦労した点、課題、今後の取組など

- ・地域全体とした取組となるようにチラシやポスターによる周知、さらに地元企業90社から協賛金を集めることで、継続的で自立的な体制を構築することができた。
- ・小中学校からの要望もあり、次年度以降も継続して総合学習を実施していく。
- ・冬場の姨捨棚田は積雪があることから、多くの方々に来訪してもらうためには情報発信に加え、ペットボトル®の設置場所の検討も必要である。県道の拡幅工事が完成した際には、県道沿いの棚田にも設置していくことを検討していく。

【選定のポイント】

ペットボトル®による姨捨棚田の新たな魅力の発掘、環境意識の向上、地域愛の醸成や地域内外への情報発信による地域活性化に大いに寄与した。また、地域住民、教育機関や地元企業を巻き込み地域全体としての取組、地元小中学校と連携した継続的な学習機会の確保や地元企業から活動費を集めることなど、自立的・継続的な実施に向け、モデル性が高い事業となった。

団体名 「信州さらしな田毎の月」プロジェクト 実行委員会	事業タイプ ソフト・ハード事業
連絡先 事務局 鹿田 敦己	事業費 3,605,582円
メールアドレス Skd-atm.0207@i.softbank.jp	支援金額 2,851,000円

鬼土間 (oni-doma) プロジェクト

取組に至る背景・事業の目的

鬼無里地区は、人口減少と高齢化により地域のにぎわいや伝統行事の衰退、地域住民の活力低下や次代の担い手となる生産年齢人口の減少など、集落機能の維持さえも困難になりつつある。

そこで、旧鬼無里中学校の特別教室棟をワークスペースとして試行的に活用するほか、鬼無里内外の参加者がテーマに沿って鬼無里について語り合う「きなさでお茶講」や「おすそわけ食堂」の開催、交流人口増・地域課題の解決に向けた高等教育機関と連携した取組などを通じて、交流人口、関係人口の創出・拡大をし、鬼無里地区の地域活性化を推進する。

事業内容

1. ワークスペース試行活用

①コワーキングスペース (ワークスペース利用) 《5/1～12/30、15人利用》

②サテライトオフィス (レンタルオフィス) 《5/1～1/31、(株)イーエムアイ・ラボ通年利用》

2. きなさでお茶講 (サイエンスカフェ形式) 《4回開催、計102人参加》

鬼無里に関心がある人と継続的なつながりの構築を目的に、カフェのような雰囲気の中で鬼無里をテーマに語り合う

①ホントにいた？鬼の話

②鬼無里の祭屋台は、どうしてこんなにすごいのか？

③鬼無里発、全国の食卓へ～その秘訣、解き明かします！～

④気になる鬼無里の木の話

3. 高等教育機関との連携 《6回開催、計141人参加》

大学生との継続的なつながりの構築に向けた連携、支援

①清泉女学院大学によるフィールドワーク

②信州大学教育学部との連携による里山環境整備

4. おすそわけ食堂 《3回開催、計46人参加》

鬼無里の存在を知って、訪れてもらうきっかけ作り

①ピザとスープ ②羽釜ごはんをやたら ③おぶっこと大根びき



【活動の様子】

事業効果

- ・サテライトオフィスは、通年、(株)イーエムアイ・ラボに活用してもらうことができ、試行としては良好な成果が得られた。コワーキングスペースは、コロナ禍の影響もあり利用は低調であったものの、利用した者からは、自然環境に満足したと意見があった。
- ・サイエンスカフェ形式により、鬼無里の外 (ソト) と中 (ナカ) の人が対等な関係で交流した。参加者の満足度は高く、また訪れたいと意見があり、取組を通じて地域の活性化にもつながった。
- ・伝統・文化、暮らしの継承、里山の環境保全などの地域課題のリサーチをした。地域で課題について考えるきっかけづくりとなり、また継続的に大学生が地域に関わる素地ができた。
- ・地区内外の延べ829人が鬼土間を利用し、交流人口と関係人口の創出、拡大につながった。
- ・鬼無里地区の地域活性化に大きく寄与した。

工夫・苦労した点、課題、今後の取組など

鬼土間プロジェクトは、今後も鬼無里中学校旧特別教室棟を活用して移住定住を見据えた、交流人口・関係人口の創出、拡大に取り組み、地域活性化を目指していく。

鬼無里の自然、教育、文化、里山暮らし、仕事などについて、関心や興味を持っている人が訪れるように、特色あるイベント開催や高等教育機関との連携を通して、鬼無里の外 (ソト) と中 (ナカ) をつなげる場づくりに今後も取組んでいく。

【選定のポイント】

人口減少と高齢化が進む中で、地域住民を巻き込み、鬼土間 (旧鬼無里中学校特別教室棟) を活用し伝統・文化・暮らしの継承・里山保全など様々なテーマによる取組を行うことで、交流人口の創出、鬼無里の魅力の発見や地域活力の向上に大きく寄与したと考えられる。また、高等教育機関と連携することで継続的な取組に発展した。情報誌やホームページでの情報発信に加え、たびたび新聞に取り上げられるなど、広く活動を伝えることができた。

団体名	鬼無里地区住民自治協議会	事業タイプ	ソフト事業
連絡先	会長 酒井 政人	事業費	1,515,306円
ホームページ	https://onidoma.net/	支援金額	1,212,000円

ものづくりの町さかき魅力発信事業

取組に至る背景・事業の目的

坂城町は、機械・金属加工を中心とした約230社の製造業が発展を遂げてきた。高度な技術力が集積した「ものづくりのまち坂城」の魅力を情報発信し、地域産業の発展、地域の活性化に繋げ、持続可能なまちづくりの実現を目的として事業を実施する。

事業内容

1. ものづくりの楽しさを学ぶ体験教室 (7月)
テーマ：環境にやさしいまちづくり ゲームで体感！「SDGs」
内容：カードゲームを通してSDGsについて学ぶ
参加者：40名 (親子14組32名、企業8名)
2. WEB企業説明会 (9月、2日間開催)
内容：企業の魅力、ものづくりの現場等を伝えるWEB企業説明会
参加者：地元企業11社、学生：373名
3. 2021 さかきモノづくり展 (10月、2日間開催)
内容：講演会4講演、企業・大学によるプレゼンテーション (地元企業14社)、企業研究発表 (高校生)、職場学習成果発表 (中学生)、パネルディスカッション等をWEB配信と上田ケーブルテレビの生中継により開催
参加者：地元企業50団体、視聴者数：2,190名



【さかきモノづくり展の様子】

事業効果

- ・WEB企業説明会、親子体験教室を連携して開催することで、総合的な地域産業の発展に寄与するとともに、地域の活性化につながった。
- ・坂城町企業が持つ高度な技術力とゼロカーボン、SDGsの取組や優れた就業環境を広く町内外の企業関係者、学生及び地域住民に情報発信するとともに、産学連携による専門的見地からの企業関係者への技術支援に加えて、中学生や高校生などが事業参画することで、ものづくりの魅力を浸透させ人材育成の機会を創出した。
- ・コロナ禍によりブース展示 (リアル) 開催は制限したが、13の多彩なプログラムをZoom、YouTubeのWEBやUCVの放送でのオンライン開催し2,000人以上の視聴により坂城町企業の認知度の向上が図られた。

工夫・苦労した点、課題、今後の取組など

新型コロナの影響によりリアルイベントは中止したものの、コロナ禍での企業活動を支援するため、2021 さかきモノづくり展をオンライン開催。また、ものづくり展、WEB企業説明会や参加企業動画のアーカイブ化、ホームページ上で継続した情報発信を行うなど、事業目的の達成に取り組んだ。

今後は引き続き、ものづくり展で発出した「環境にやさしいものづくりメッセージ」の共通ビジョンのもと坂城町企業及び関係機関が連携し、2050年ゼロカーボン、2030年SDGsの実現に向けて取組を進めていく。

次回のさかきモノづくり展は坂城町の工業発展を牽引するイベントとして、時代のすう勢を捉えたテーマを掲げ、3年後の2024年に開催する予定。

【選定のポイント】

メイン事業の「2021 さかきモノづくり展」は、新型コロナウイルスの影響により急遽オンラインのみの実施となったものの、2,000名以上の参加がみられるなど、町内企業の高い技術力とゼロカーボンやSDGsへの取組等のPRに大きな効果があった。また、地元中高生等との連携により、次代を担う人材育成、ものづくりの町の浸透や郷土の誇りを育むとともに、UIJターンの促進につながったと考えられる。町や地元商工会等、地域全体で取り組み、地元商工会等の評価も高く、坂城町の工業発展、継承につながる事業となった。

団体名	公益財団法人さかきテクノセンター	事業タイプ	ソフト事業
連絡先	事務局長 柳澤 英明	事業費	7,497,855円
メールアドレス	techno@sakaki-tc.or.jp	支援金額	5,028,000円